渋沢栄一の論語観
―その思想の形成過程と影響を中心に―
（要　約）

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D183311
氏　　名：左曼麗

本論文の第一部（第一章から第六章まで）は、論語を軸にして、各時期（少・青年時代、仕官・実業時代、引退後及び晩年）の渋沢思想を考察し、渋沢の論語観の形成過程を絵描き出そうとした。第二部（第七、八章）は、渋沢の論語観の同時代の影響、現代社会での受容、及び中国での影響について検討を行った。具体的には以下のようになる。

第一章は、渋沢と『論語』との関係を軸に、少・青年時代の経歴を考察した。渋沢が生まれた江戸後期には、儒学を中心とした教育が武家のみならず、庶民層にまで浸透していた。そうした中、経済の発展につれて台頭した富農層の間では、上昇意識を持つようになり、漢学や武芸を学ぶ風潮が盛んであった。渋沢の父市郎右衛門はそうした中の一人であり、渋沢に「武士風の教育」を与えた。そのうえ、半農半商の性質を持つ渋沢家でも、江戸後期にすでに存在した儒教をバックボーンとする商業経営理念に磨きをかけていると考えられる。渋沢の成長に重要な役割を果たした三人―父市郎右衛門、従兄の尾高淳忠、儒学者菊池菊城の影響により、青年期の渋沢の中に、『論語』は学術書ではなく、実践のガイドブックであるという見方が形成された。この時期は、渋沢の論語観形成の萌芽期で、『論語』をもって「修身・斉家」の部分を完成させたといえよう。

第二章は、渋沢の仕官・実業時代における商業道徳論形成の過程および『論語』との結びつきを検討した。渋沢が仕官時代に提唱した「商業富国」という考えは、『立会略則』に現れている。その考えは、時代精神を反映したものであり、彼の 1867 年の欧州滞在の経験とも深く関係していた。また、渋沢の商業に対する理解が時期によって異なるため、筆者は実業時代の 36 年間を初期、中期、後期という三つの段階にわけることにした。実業初期（1873 年 - 1885 年）の渋沢の講話のキーワードは、「商業立国」、「商業富国」にとどまっており、その思考は、『立会略則』が完成した時期の延長線上にあった。実業中期（1886 年 - 1901 年）、渋沢は、商業教育を振興させるために、商業道徳の確立の重要性を繰り返し強調した。さらに、1902 年の欧米漫遊に始まる実業後期（1902 年 - 1909 年）において、渋沢は明確に『論語』に基づく商業道徳論を説くようになった。

第三章は、実業後期から、渋沢が孔子祭典会、陽明学会、修養団、講道館、帰一協会などの組織の活動に積極的に参加したことについて検討を行った。これらの場を借りて、渋沢は頻繁に井上哲次郎、星野恒、三宅雄次郎、東敬治、蓮沼門三、嘉納治五郎、姉崎正治などの日本の知識人、哲学者と交流を図った。渋沢のいわゆる精神界に入っての実践は、1909 年前後にすでに始まっていたといっても良いであろう。渋沢の「商業道徳」から「修養道徳」への関心の転換過程において、以上の団体組織に属する学者・知識人との接触・交流が果たした役割を無視することはできないと考える。

第四章は、『実験論語処世談』の孔子に関する言論の分析を通じ、渋沢の孔子観を検討した。また、学者井上哲次郎、服部宇之吉、宇野哲人との関わりについても検討を加えた。渋沢は、孔子を「平凡な聖人」、「円満な人」と評価し、孔子を人生のインストラクターとし、孔子の教えを規矩準縄とした。その上で、孔子を「進歩主義者」、「啓発教育の実践者」に位置付け、孔子の思想はいつの時代にも通用すると述べ、実用主義の立場で孔子学を捉え、孔子の道徳は実業家のみならず、社会全体に普及させる必要があると考えた。孔子の政治観について、渋沢は、孔子が政治を社会を安定させるための手段として扱ったと主張した。また、渋沢のまとまった孔子観の形成及び修養道徳論の形成に、井上哲次郎、服部宇之吉、宇野哲人などの学者たちとの交流が果たした役割も無視できないと考えられる。

第五章は、渋沢の関心が商業道徳から修養道徳へ転換した時代背景を考察した上で、渋沢の修養に関する著書、講演集をめぐり、検討を行った。教育勅語の発布後、日本では、勅語の趣旨を徹底させる道徳教育が全国的に実践されるようになった。そうした中で、「修養」という言葉が盛んにとりあげられるようになり、教育界においては、修身教育の重視

が喧伝され、知識層による修養に関する言論も様々な形で世に広まった。渋沢の商業道徳から修養道徳への関心の転換は、こういった時代背景のもとで起こった。1912 年の『青淵百話』における『論語』の引用・解釈は、実業時代より、大幅に増えた。『青淵百話』以降、渋沢の修養に関する著書、講演集は多く出版された。その結果、渋沢の名は実業界に留まらず、彼の『論語』に基づく修養道徳論が広く世間に知られるようになった。渋沢は『論語』を手段として、「実業界の道徳」問題のみならず、より広く「社会道徳」問題に関心を寄せた。

第六章は、晩年の渋沢による儒教団体斯文会への参与、及び斯文会を通じて完成させた論語に関する事業を整理した上で、同時期の彼の論語理解、『論語講義』の位置づけを検討した。晩年の渋沢は、形式に拘らず、様々な方法で論語に接近しようとした。その一環として、斯文会等の儒教団体を通じて、孔子思想の普及に努めるかたわら、国訳論語編訳と論語蒐集の事業に取り掛かった。『論語講義』の編纂に至っては、研究者に近い形式で、論語を解読しようと試みた。『論語講義』の学術書としての価値はともかくとして、そういった実践も渋沢の論語観構築に不可欠であったと考えられる。

第七章は、実業界における渋沢の論語観の影響及び現代社会における渋沢の論語観の受容をめぐり、検討を行った。現役の経営者・管理者あるいは経営・管理方面の従業希望者を多く抱えていた竜門社の社員は、近代日本経済発展の中核層として、渋沢の思想の恩恵を受けていた。また、渋沢の思想・行動を記録する役割を果たした『竜門雑誌』に加えて、『青淵先生訓話集』、『青淵先生演説集撰集』などの出版物を通じて、渋沢が終始一貫実践躬行の指針とした論語観を社会生活の指導精神として提唱しようとした。さらに、実業時代において、渋沢は、実業者として個人の成功が評価された。それに対して、引退後、渋沢に対する評価はより立体的になり、実業界への経済的な貢献を認められたうえで、その人格に対する評価、精神界における貢献を称賛する言説が多くなった。また、彼の論語に基づく思想は後世の実業家に大きな影響を及ぼした。

1960 年代前後、日本において経営理念に関する研究が体系的に行われ始めた中、土屋は「日本の土壌」に基づく経営理念を提唱し、渋沢を儒教倫理を基本とする経営理念の代表者としてあげた。その後、1980 年代 - 1990 年代半ばにかけて、東アジアで、「儒教文化圏」という概念を中心とした議論が展開された。多田顕を始め、『論語講義』を対象とし、渋沢の論語思想に注目した研究者が増えるようになった。そして、1990 年代後半から、日本では大手企業、金融機関などで不祥事が続々と発生し、企業倫理に関わる問題が頻繁に生じていた中、道義・道徳を尊重する傾向が回復し、渋沢の事績と精神が見直され、渋沢は道徳的模範とみなされるようになった。そうした中、渋沢に関するいわゆるノンアカデミズム書籍の出版ブームが到来した。渋沢の論語に基づく道徳思想は、今日的な意味を失っていないばかりか、現代社会における指導性のある経営・人生哲学として、さらに輝きを増しているといってよいであろう。

第八章は、近代以降中国において『論語』の唱道者渋沢に対する認識と、1980 年代以降中国伝統文化の影響により形成された渋沢の論語観の逆輸入の二つの問題を中心に検討を行った。近代中国は、日本の経済発展の経験を参考にしようとし、渋沢を日本実業界の重要人物として取り扱った。ただし、1914 年の渋沢の中国訪問に関する報道や当時の新聞雑誌の記事からみると、渋沢に対する関心は彼の経済的地位、対中姿勢に留まっており、渋沢と、『論語』に代表される儒教文化との関連についてはあまり注目しなかった。一方、羅振玉、李文権などの知識人は中国の実業を振興させるため、渋沢を取り上げた。

それ以降の数十年の間、渋沢に関する研究はほとんど見られなかった。1980 年代に至って、中国の経済発展に伴い、儒学を核心とする中国伝統文化と経済発展との関係が、学

術界において盛んに議論されるようになり、企業家の経営思想も重視されるようになった。そうした時代的な流れの中で、渋沢が儒教倫理を基本とする経営理念の典型として扱われるようになった。渋沢の『論語』に基づく思想は、中国にとっても貴重な示唆を与えることができると考えられたのである。こうして、渋沢の思想は、学術研究や関連書籍の翻訳などの形で、中国に導入された。